



「.....ないね」

「.....ないわね」

「.....ない.....」

「ないねえ」

「ないわねえ」

「.....ない.....うう」

「あー、雪絵がベソかいている」

「ああん、可愛いつ」

「.....じゃないよ！ ない！ どういうことっ?!」

そんな訳で、もともと置いてあったはずの場所から忽然と所在が不明となった、消え失せたチョコレイトを求めて、部屋中を三人の女子が手分けして探してみたのだった。

しかし、もともとが見える位置にあったモノなので、目の触れる場所——例えば、棚の上や座椅子の影などに、案外こそっと何かのはずみで移動させて、気付かなかったか、忘れていたでもしたのではないかと、そういう線での搜索が行われた。

しかし、見えるところにあるのならば、すぐに見つかるだろうということを如実に表すように、見つからなかった。

ならばしかし、この客間は本来は応接用で、簡素であり、調度品——特に引き出しを備えた家具は一つしかなく、それもすべての引き出しを引いて、いちおう中を検分してみたものの、仁美から贈られたチョコレイトの箱は見つからなかった。

「つまりは、どういうことかと言うと、この部屋から持ち出された可能性が高いと、そういうことじゃないかな」

と仁美。そこに春花が半畳を入れる。

第三章 太刀の四

「待つて仁美ちゃん。それは安易に、ここにいる人間以外がなんらかの意図をもって持ち去ったということにならない？ そういう線が可能性としてあるにはしても、まず人を疑うよりも、自分の手抜かりがないかをしっかり埋めておくべきよ」

その言葉にハッとさせられる顔になって、仁美はぎこちなく頷いて返す。

「そ……、そうでよね。他人を疑って、実は自分の不手際、勘違いでしたじゃあ、カッコつかないし、相手もカンジ悪いですもんね」

「ええ、じゃあ、少しまとめましょう。雪絵」

「はい」

「まずは、実はあなたが本当は、もうチョコレイトを全て食べてしまっていた、とうことはないかしら。例えば、私がこの部屋を離れている間に、そういうことがあって、左ノくんなりがそれを察して箱を処分した、とか」

こういうことを訊いても気を悪くしないでね、と春花は付け加える。雪絵はそんな気もおきなかったので、訊かれたことにだけ返す。

「ううん、食べてない。仁美も視てて知っているけれど、左ノに見せてあげていたんだ、ついさっき。その時は、中身は確かにまだ残っていたよ」

「確かなのね」

「そうですね、はい」

仁美の方が頷いて返すので、春花は瞼を伏せた。

ふむ。

「春花さん？」

「……………そうねえ。あら、なにかしら、雪絵」

手をちょこんとあげて見せる雪絵に、春花は首を傾げて訊く。

「あのね、さっき教えて貰ったじゃない。自内証というモノを。自分で考えて答えを見つけるという事を。だから……」

「ゆーきー……っ」

「えっ?! なになにつ」

横合いから仁美が肩に腕を回して来て、ニヤリと笑んだ。

第三章 太刀の四

「あんたね、自分のことでも協力してやったほうが早い方は、その方がイイことが多いんだよ。あんたのそれは、ちょっと自分だけで背負い込む行為だけ」

「そうね。こういうことで他人を頼っても、それは別に良いと思うわよ、私も。頼りつきりにならないで、ちゃんと自分でも考えることをするのならね」

「そうかな……」

「そうそう、というか、雪夜の紛失事件とか！ 面白そうじゃん！ ほっとけないよ！」

「……………えー」

こほん、と春花は咳払いをして、場を仕切り直す。

「じゃあ、この部屋をくまなく探したところで、どうやらこの部屋に例のブーツがないのは間違いないようね。では二人に訊くけれど、考えて欲しいけれど、どうしてあのチョコレートは見失われたんだと思う？」

「……………？」

「どうしてって……、そりゃ、元あった場所からなくなっているんだから、誰かが動かしたから……とか？ もしくは、何らかの拍子にぶつかって動いた、とかですかね」

「後の方の場合は、まだこの部屋で見つかるんじゃないかな」

するすると会話が進行するのに、ついていこうと雪絵もしゃべる。

「そうなのよね……つまりこれは、第三者……いえ、私達が三人だから、第四の存在による何らかの意図で、チョコレートは持ち去られた結果、と考えるのが、やっぱり自然のようだと思わない？」

「はっは一ん、つまり、犯人がいるわけですね！ やはり事件の匂いですね！」

「事件って……」

「つとなると、外部の犯行の調査が必要というヤツですかね」

と、仁美が少し興奮気味に熱を帯びた声と表情になるのを、しかし春花がびしゃりと制した。

「お待ちなさい、仁美ちゃん。易く事を荒立ててはいけないわ。ことは組の仲

第三章 太刀の四

間.....家族を疑うことよ。だから私は。一つ確認したい」

「確認ですか」

「そうよ.....雪絵」

「なに？」

「あなたは、無くなった自分が贈られたチョコレイトを、見つけ出したいかしら？ どうしても、それをしたいかしら？ もう一度、あの魔性の味を味わいたいと願うかしら？ 自分のモノを理不尽に奪われ、それを取り戻したいと思うかしら？」

あなたに、その気があるのかしら？

と春花は雪絵の瞳を視て問うた。それに対して雪絵は、一時黙った。

幾分弱まった風が、一瞬、轟と鳴り、雨戸をガタガタと揺らした。

「食べたい.....！」

どうやら、あの味を脳内と舌で再生していたようであった。きっと口内は濡れ濡れだ。

「わかったわ、私の可愛い娘。もう多くを言うまい。私たちが力になるわ。ではこれより、チョコレイト紛失事件探索捜査を開始するわ！」

「狩りの時間ね」

まあ、その気になれば新しく買ってきてやることは出来るんだけどね。と仁美は思ったが、二人のごんごと燃え上がる様子に対して、水を差すようだったので、ここは黙っておくことにした。

というか、楽しそうだしね！

そして、次に三人のとった行動は、役割分担の決定だった。そうして、それぞれがそれぞれの受け持ちの探索のための役割を担い、行動し、情報を集めるべく動き出した。

まずは、この客間の外に出ることを三人は始めた。時刻はもう夕餉時から随分経ち、夜も更けてきて辺りは暗く、雪は弱まったものの風が時折飄と吹いて木造の離れの建物を揺さぶっている。

手燭を持ち、春花はこの離れ全体の.....特に建物周辺の様子に変化がないか

第三章 太刀の四

といったことを見て回る。雪絵は春花のそれについて、この離れの各部屋を回り、大まかにではあるが客間同様に家探しを行う。そして、仁美はというと、まずはこの離れにいる人間の所在と数を探るのである。

手にする灯りだけの廊下は暗く、しんと冷えて、足袋の先から床板のひやりと刺すような冷たさが感じられる。その離れの中を歩き回る三人。

春花が雨戸を少し開いて表の様子を見ると、やはりというか、風は吹いてはいるが、半日以上降り続いた雪はやんでいる。屋敷の庭は真っ白な原と化している。雲の向こうにうっすらと月が見え、ほのかに白い光を感じる。陰影の無いその雪の原は、人の足跡がないまっさらな状態だ。

そうして、何カ所か同じように離れの表の様子を見る春花。どこも同じような静かな様子だ。

ある程度の時間が経ち、探索を済ませた雪絵と春花は、芳しくない結果に顔を見合わせる。どの部屋にも、目当てのモノは置かれていなかった。

「となると、いよいよ第四の存在か」

「誰か犯人がいるのを、疑わざるをえないんだね」

そうなる、まずはこの離れの人間か、ということで、二人は仁美が向かったこの棟の管理人である女中と中間が詰める部屋に足を向けた。

「あ、姉さん。それにあね姐さんも」

女中たちが詰める離れの、奥が勝手の土間――台所へと続く部屋。その入口に立っているのは左馬ノ介だった。

「何か、仁美さんが問題が起きたと言って来たので、離れの者が集められたんですが、何があったんです？」

「そうね、まずは雪絵、あなたが説明なさい」

「え、私？」

「被害者はあなただけけどね、こういう時に矢面に立ってしゃべる経験をさせておきたくてね」

第三章 太刀の四

「むう、わかったよ」

そして、皆が部屋に入り、襖を閉じた。

「つまり、そのチョコレートってお菓子がなくなったのを探しているわけですね」

雪絵の説明を聞いて、静かにふくよかな笑みを浮かべたのは、離れの女中頭の福珠だ。

「西方にはそんなお菓子があるんですね～。私も食べてみたいです～。ねえ、つばきちゃん」

「ひな、あんたね、これ私たちが疑われてるって話だよ。なに呑気なこと言ってるのよ、もう」

福珠と共に離れを中心に受け持ちとし、家事全般庶務にあたる女中の、まだ若い二人、ひなぎくとつばきが共に言った。

「はあ、お菓子ねえ、しかし私らはそれぞれここで、姐さんらの夕餉の片付けや、掃除をしておりましたから……それに、そもそもそんな大それたことをしやしませんよ」

そう言うのは、この離れで働く者の中で左馬ノ介以外の男手、中間の仙蓼だ。彼は物資の運搬が主だった仕事ということがあり、がっちりとした体格をしているが、口調は穏やかだ。

「取り敢えずあたってみたところ、今離れにいるのは、左ノくんを入れてこの五人でしたよ、春花さん」

「ありがとう、仁美ちゃん」

座す一同を見回して、春花はこほん、と軽く息をつき、

「まずは、夜も時間を回っているのに申し訳ないわね。説明したように少し問題が起きたので、手間だけれど力を貸してくれると嬉しいわ」

春花の言葉にそれぞれが反応を示した。

「いえ、お嬢さんの貰いモノがなくなったら、それは哀しいことですね。お力になれるかわかりませんが、大丈夫ですよ」

第三章 太刀の四

「福珠さんは優しいなあ。でも何これ、私たち事情聴取とかされるんですか？」
「チョコレートって甘いんですか？ 拾い主には一割いただけるんでしょうか～」

「ははは、ひなぎくちゃん、お財布じゃないんだから。しかし、いいね」
と仙蓼が笑った。確かに西方のみならず、この郷にも拾った人間に持ち主がお礼をする慣例はある。

「そうね、つばきちゃんが言ったように、私たちはこの離れの人間を疑っているわけだから、無事に遺失物が見つかって疑いが晴れたら、相応の例はさせてもらうわ。約束ね」

微笑む春花に、雪絵も頷く。

「じゃあ、さくっとお話を聴こうかな」

仁美はメモ帳を手に、鉛筆をぴしりと立てた。

「まず、夕餉時には彼のチョコレートは客間にあったのは確かなんだよね。夕飯の鍋をつついたしばらく後で、雪絵がチョコをちょこっとつまんでいたんだよ」

「仁美、それはちょこっと余計な話だよ」

一応話さないよね、と仁美は親指を立てて返す。周囲の人間は、お嬢同士の遣り取りに笑うのを堪えていたりする。しかし、

「わー、雪絵お嬢さん、食いしん坊なんですね～。うふふ」

「うふふ、じゃない！ バカひな！」

「いいのよ、つばきちゃん、ひなぎくちゃん。雪絵の大食いは組の男衆も知っているからね」

こくりと頷くあたり、雪絵にはこういうことの羞恥心がないらしい。

ひなぎくではなく、つばきが安堵の息を吐いた。

「で、となると、夕餉以降に客間に入った人間がまず……そう、犯行が可能だったということになるんだよね」

「それについて、まず先に、私たちが把握しているモノと、お手伝いさんたち

第三章 太刀の四

が認識している様子とを、擦り合わせをしましょう」

「そうですね」

仁美に返す春花の言に、福珠が女中、中間一同に頷いてみせた。

「まず、夕餉時以降のことですわね。私たちから話しましょう。時間にして七時くらいですかね。私とつばき、ひなぎくがお料理を片付けに入らせてもらいましたね」

「はい、それは私たちも憶えていて、確認できます。お茶を淹れてくれて、ありがとうございます」

「出入りとしては、その直後に大姐さまに頼まれて、櫛を持って行きましたね」

「.....えっと、もっと詳しく順序を書くね」

と福珠の言葉を一旦とめて、仁美が鉛筆を走らせる。

「だいたい七時に福珠さん、ひなぎくちゃん、つばきちゃんの三人が客間に入って、三人で食事の片付けをしていた。そこに、春花さんが福珠さんに頼んで櫛を持ってきてもらうことになって、福珠さんが一旦客間を離れたんですよ」

「そうですね。それで頼まれたモノを持ってきて.....三人で客間から引きあげたんですね」

「ふうーむ」

カリカリと鉛筆を動かす仁美のメモ帳を、横から雪絵が覗くと、『三人グル?』と書き込んであった。雪絵は眉根を寄せたが、何も言わなかった。

「じゃ、次に客間に入った人間だけれど.....」

「それは俺ですね」

そう言って手をあげたのは、左馬ノ介だった。

「客間の暖をとる炭火を替えに、客間に行きました。丁度姉さんたちの様子が見たかったから、俺がお手伝いの皆に申し出たんですよ」

「そうだったね〜」 とひなぎく。

「.....うん、ここで言わなきゃいけないんだけど、左ノくんが部屋に来たのは、春花さんが中座している最中で、その時の遣り取りで問題のチョコレートはまだあったんだよね」

第三章 太刀の四

「そして、私が戻ってきて後に、それがなくなっていることに気付いた……」

顎に手を当てて、つばきが慎重そうな声で言った。

「その間や後には、客間に入った人間はいないんですか……？ 三人が三人とも部屋から出ていた時間帯があつたりは……」

それはない、と仁美、春花、そして雪絵も応える。

女中たちの部屋にいる一同が、左馬ノ介の方を視た。

「……あ、やっぱりこれは俺が犯人ってながれですよね……どう考えても」

頬を掻きながら、左馬ノ介が困ったようにその視線に応える。

しかし。

「だが、織田くんは違うだろ」

今度は一斉に声を発した主——仙蓼に皆が向いた。

「いや、その頃、俺が厠から戻ってくる廊下で、織田くんとすれ違ったんだが、金バケツとかで両手が塞がっていたから、何かを持って……この場合は菓子箱だね、それを持って移動することは出来なかったんじゃないかな」

「そのバケツの中に入っていたということは？」

追撃する仁美に、仙蓼は首を横に振る。

「そこで会ったんで、この部屋まで織田くんの持っていたそれらの道具を引き継いで持ってきたのは俺ですが……入っていなかったんじゃないかな。まだ中身はそのままだし、視てみれば……」

座を立つ仁美は、雪絵も立たせた。福珠はひなぎくに廃炭の置き場を教えるように促した。

「これですね～」

「……ふうむ」

バケツの中身を火鉢であぜくり返して視る仁美と、覗く雪絵は、このバケツの中には目当てのモノがないことを確認する。もっとも、廃炭に紛れていたら酷いことになっていることだろうが。

「ありがとう、ひなぎくちゃん」

第三章 太刀の四

「ありがとね」

「いえいえ～」

そうして座に戻ってきた三人に、春花が告げる。

「ということは、どういうことだと思うかしら、仁美ちゃん、雪絵」

「う～ん、時系列でいうと、一番疑いがかかるのは左ノくんなんだけれど、それは仙蓼さんの証言で少し、どうとでも取れる感じになってますよね」

雪絵が仁美のメモ帳をまた覗くと、そこには 『仙蓼、バカ左ノ、共犯？』と書いてあった。

「となると、どういう事なんだろう？」

首を傾げる雪絵の目の前で、一つ手があがった。

「あの、ちょっと気になるんですけど、いいですか」

それはつばきだった。

「思うんですけど、疑われているのが私らこの離れに今いる人間たちになってるけれど、それっておかしくないですか？ この組の屋敷は広いんだし、他の棟の人間が何かしらの手を使って犯行に及んだ……とか、そういう可能性もあるんじゃないですか？」

「……………」

突風が吹いたのか、みしりと家が鳴ったようだった。

考えていたのだろう、僅かの沈黙の後に、春花が場を持ち直すように穏やかな声で言った。

「でも、それはないのよね、どうやら」

「そうなんですか？ 春花さん」

一同が仁美と同じく問い質したいように春花に視線を注ぐ。それに対して、雪絵が頷いて返した。

「うん、私たちはこの離れの外周も視て来たんだけど、外は全部、雪で埋まっているし、足跡もなかった」

「そっかあ。雪がやんでしばらく経っているし、その間にこの離れに出入りした人がいたら、足跡でわかるもんね～」

第三章 太刀の四

「ぐ……っ 確かにそうか……」

ひなぎくはたれ目でつばきをニコニコと視た。ツリ目でギラリと睨んで、ひなぎくの腿をつねって返すつばきだった。

「周辺は雪で閉ざされ、建物は人の出入りが出来ない状態。さながら孤島の閉ざされた館ミステリーですねえ」

「あら、福珠さんも嗜みがおありかしら」

「ええまあ、暇な時にちまちまとですが」

春花と福珠がこんな近くに新たな仲間がいたのかと、その発見に互いに瞳を輝かせて微笑みあった。

「こほん。まあ、とにかく、となると、ますます解からないわね」

「そうだね」

仁美と雪絵がメモ帳と睨めっこをする。

「状況からいうと、左ノくんが客間に来た後がポイントよね。ねえ左ノくん、君はどう思うかしら。左ノくんだとしたら、誰が持ち去ったと考えるかしら」

微笑んだ春花の顔。そして、室内の灯りに陰影をともなって映える緋色の瞳に、しかし左馬ノ介は何の気もなく答える。

「そうですね、モノがチョコレイトなんですから、お菓子なんですから、甘いモノが好きな人が持ち去った、とか？」

「私、とってないです～」

と、すかさずひなぎくが目を濡らして訴えた。

はいはい、と宥めるつばきに、春花は頷いて、

「けれど、それは面白いわね、左ノくん。動機から探っていくという訳ね」

一同が左馬ノ介を視た。その中には、普段仕事で話をするときとは違う目の色もあって、左馬ノ介は居心地が悪そうに廊下への襖を見遣る。風はまだ、時折飄と鳴り吹いている。

「しかし、動機ねえ。恋泥棒みたいなものかな」

「恋泥棒ですか～」

仁美の言に、ひなぎくが呑気そうに疑問の声をあげる。

第三章 太刀の四

「この場合は、ヴァレンタインの慣例——愛の誓いの品を奪った、ということですかね」

と左馬ノ介。

「んー、でも、恋でも愛でも、それって人のモノを掠め取ったところで、真実自分のモノにはならないわよね」

「そうですよえ」

春花の言に、今度はつばきが頷いた。

「こういうのはやっぱり、自分がその人からもらわないと」

「そうねえ。でないと、偽りでさえない」

「偽りでないと、何ですか？ 姐さん」

「ただの僻みね」

ぶっ、と左馬ノ介と仙蓼が嘖き出した。そして、仁美とつばきが笑いをこらえている。それを雪絵が、意味が分からなそうに小首を傾げて視ていた。

「じゃあ、どうですかね。……動機をうかがう、ということでこれは、この場の全員で、お互いに各々の性格を言っていくような感じですかね」

仁美が場を仕切り直して、そう声を出した。

「えー、めんどくさい、もう眠いー！」

「もう、つばきちゃん～」

半ば飽きてきたのか、実際に仕事終わりの休息に入りたいという本音なのか、つばきが不満を言い始めた。それに対して、雪絵が居住まいを正して、彼女に正面向き、拳をついて軽く頭をさげた。

「始めたことだから、最後まで貫きたいよ。迷惑をかけるけれど、付き合ってくれと嬉しい」

「……お嬢」

組の中でも、女中たちにも無愛想な印象で通っている雪絵の、そうした素直で実直な態度に、仁美といい勝負な発止さのつばきも口ごもる。

「う、……うん、はい。分かりました、よ……」

周囲の春花はいうに及ばず、福珠も、左馬ノ介も、雪絵がこうした態度を見

第三章 太刀の四

せることに驚くとともに、彼女の成長を感じた。

スジを通すために自らを晒し、頭をさげる。それは武侠の礼としてだけではなく、人としても素晴らしいことよ、と心の中で語りかけ、春花は密かに笑んで、我が娘の横顔を見つめた。

.....続く。